

学会印象記

7th ICAAP のニューズレターはこうやって作った

高 田 昇

Noboru TAKATA

広島大学病院 エイズ医療対策室

◎組織委員

2001年に栗村 敬先生に「あなたも手伝って」と言われて加わった第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(7th ICAAP)の組織委員でした。これほど大きな会になると、中にある個々の組織委員には全体が見えないものです。多くの会議が持たれたようですが、地方からでは出席できないことが多く、自分は何の役にも立たないと感じていました。かろうじて組織委員の中で情報を交換するメーリングリストの立ち上げを行い、約1,200件のメールが往来することになりました。

◎広報委員会の仕事

組織委員会の下には様々な小委員会が作られ、私は広報委員会の名ばかりの副委員長になりました。委員長は根岸昌功先生で終始大活躍でした。会期中の広報委員会の基地は、ポートピアホテルの2階に作られた記者会見室の横、メディアセンターと名付けられた二つの部屋でした。一つの部屋は一般メディアの記者の執務スペース、そしてもう一つの部屋は私たち広報委員会の仕事場でした。

広報委員会の仕事の一番は記者会見(プレスカンファレンス)です。自分で広報活動をするのではなく、メディアの記者に広報してもらうことなのです。その日の特別講演(プレナリー)の演者に対して記者が取材をするお膳立てをします(図1)。公式用語は英語ですが、日本の記者もたくさん来ているので日本語対応が必要です。広報委員会は時間配分、司会進行、同時通訳の準備、資料準備をします。その日のハイライトを紹介するというものもあったかもしれませんが、私は見聞していません。

次に、組織委員会事務局からの公式発表や、関係団体からの記者発表の調整があります。事前に英文原稿が届き、翻訳したり要旨をまとめます。記者会見や発表は、新聞の場合は夕刊に掲載するのか、朝刊回しになるなどを考慮する必要があります。

◎ニューズレター作り

大きな学会となると、翌日の朝に前日の会議の様子がニューズレターになって会場で参加者に配布されますね。



図1 Commercial Sex Worker のワークショップ後の記者会見風景。

あれです。たぶん抄録集をあらかじめ読んでおいて、それでニュースの原稿を書きためておくのだろう、苦労はなさそうだと勝手に思っていました。ところが実際は違っていました。広報委員会は実際にニューズレターの記事作成、編集、校正、版下作りを英語版と日本語版で作るのです。3,000部が配布されました。

◎HDN というプロの記者集団

HDNとはHealth & Development Networksの略号で、特にエイズや開発に関連した世論形成に貢献している非営利組織と私は受け取りました。ウェブでは(<http://www.hdnet.org>)電子掲示板を通じた討論などを行っています。HDNは組織委員会からニューズレター作成を依頼されました。彼らは男女18人の記者団で、一般メディアの記者とは別、つまり私たち広報委員会と同じ部屋にスペースが与えられました。

HDNは午前と午後にミーティングをして、各会場に取材にでかけます。バラバラにメディアセンターに戻ってきて英文の記事を書きます。彼らの中にリーダーがいて、チェックを行います。午後2時頃には出揃います。誰が書いたどの記事が、どういう過程で採用されたのかは私たちにはわかりませんでした。印刷所の担当者が夕方に現れま



図 2 PC のそばで昼ご飯の松田さんと筆者。

す。PC 上で英文の記事を写真と組み合わせながら印刷用の版下を作っていくのです。英文のニュースレターは A4 判の 4 ページ仕立てでした。

◎日本語版編集長

日本語版編集長の 1 日目は稲葉雅紀さん、2 日目は松田瑞穂さん、3 日目と 4 日目が私という分担でした (図 2)。日本語版と言っても独自の記事を書くのではなく、HDN が作った英語版を日本語に翻訳するのが仕事です。しかも日本語版は 2 ページで、折り込み広告のように英語版の間に挟み込むのです。日本語は英語よりスペースは少ないですが、さすがに半分にはなりません。写真を省略し、小さなフォントでギュウギュウ詰めになります。

私たち日本語版の制作スタッフは、できあがった英文記事一つずつフラッシュメモリーで受け取ります。お昼から夕方にかけて、記事をボランティア (お名前を控えていないので省略します。ごめんなさい。) に渡して翻訳を依頼するのが「編集長」の仕事です。遠慮をせずに記事を配らなないと、ボランティアはフッと消えてしまうことがあり慌てます。

私は自分のノート PC を持ち込み 1 日目から翻訳をやりました。LAN でネットに繋がるし、使い慣れた日本語変換ソフトは変換効率が良いですし、英和辞書、医学辞典などが入っていますから重宝しました。他の方は、日本語変換に苦勞をされたようです。

夕方はできあがった和文を 2-3 人で校正してゆきます。ということは元の英文も全部目を通さないといけないことになります。お任せにはできません。用語の統一も必要です。一行抜けていることがあったり、意味が反対になっていることもあります。日本語にない表現の場合は、意識をするのですが、根岸先生は原文に忠実で私はしばしば叱られました。晩ご飯を済ませた頃にプロの記者である宮田一



図 3 英語版と日本語版のニュースレター。

雄さんがメディアセンターに入ってきます。「ちょっと見せて」と記事を取り上げたら大変! 「ここは削るよ。なぁに意味が通りゃいいんだ! 」と大なたを振るうのです。さすがと感心。

英語版の版下ができただけで、夜の 8 時頃には日本語版の全記事が揃い、印刷所の担当者に渡します。元々ギュウギュウ詰めのところ「あと 5 行減らせませんか」と言われて、頭を抱えながら行数を稼ぎ、版下のゲラ刷りができて無事完了でした。

◎私にとっての 7th ICAAP の成果

このように、組織委員という名ばかり派手で、実は穴蔵に閉じこもって作り続けたものが、この 4 部作ほかです。7th ICAAP のウェブに PDF 版で掲載されています。参加されなかった方にも是非ダウンロードして呼んで読んで頂きたいと思います (図 3)。

<http://www.icaap7.jp/data/daily.html>

まるまる 4 日間メディアセンターの中にいて外で何が起きているのか、天候はどうなのかさえ知りませんでした。HDN の記者たちが書いた記事を通じて、そして新聞の記事やテレビのニュースを通じて、7th ICAAP の内容を私は知りました。それらの記事は私の目と鼻の先でできあがっているのが不思議でした。

私の病院にアジアの某国からの患者さんがいます。会期の最後の日に HDN のメンバーに某国のエイズ情報について尋ねたところ、その国の患者さんを紹介してくれました。その方とホテルで会いメールアドレスの交換をすることになりました。病院に帰って患者さんに母国の情報を伝えることができました。これはとても大きな成果でした。